みしまにすむ 三島市ならではのサポート事業がたくさん！

子育て支援制度

安心のサポート体制のあるこのまちで、
楽しみながら子育てしてみませんか。

充実の子ども医療費補助制度

子どもの医療費は**中学3年生まで**
入院・通院ともに無料で安心！

安心な妊娠・出産・子育て相談窓口

三島市子育てコンシェルジュ

子育てについての悩みや就学前のお子様の預け先に関する保護者の相談に応じ、情報提供。

子育て世代包括支援センター

母子保健コーディネーターが妊娠期から出産、子育て中の皆さんの様々な相談に対応。

お父さんの育児休業取得補助金

男性従業員の5日以上の育児休業取得に対して、**本人と事業主にそれぞれ1日につき5千円の補助金を支給。**（上限10万円）
お父さんの育児・家事参加を支援！

負担が軽くて嬉しい保育料（保育園・幼稚園）

国の定める額から約4割軽減した保育料で利用者の負担軽減。世帯年収や第1子の年齢制限を設けず、**第2子は半額、第3子は無料。**

住まい支援制度

移住・定住をお考えのご家族を
きめ細かく支援します。

住むなら三島　中古住宅情報サイト

劣化の有無など**住宅診断を行った中古住宅の情報を公開**で便利！安心！

http://www.city.mishima.shizuoka.jp/cp/house/index.html

若い移住世帯かつ住宅購入者向け補助金制度

住むなら三島移住サポート事業

○市内に住宅を建設または取得する方（中古住宅含む）
○夫婦いずれかが40歳未満
以上の条件が前提で

県外からの移住者	市外からの移住者	お子様1人につき
120万円支給	**50万円支給**	**10万円上乗せ**（上限30万円）

※平成28年4月1日以降に工事請負契約または売買契約を締結した物件
※住宅取得後、1年以内であること

若い移住世帯・子育て世代向け補助金制度

移住・子育て・耐震リフォーム事業

① 子育て世代	② 県外からの移住者	③ 耐震リフォーム
上限30万円支給	**上限20万円支給**	**上限15万円支給**

①子育て世代は中学生以下のお子様がいる世帯
②夫婦いずれかが40歳未満
③単独の場合、市内業者が実施したリフォームのみ
※上記の補助の併用可能。(最大65万円)

詳しくはみしまりずむWEBサイトまで

http://www.city.mishima.shizuoka.jp/cp2/index.html

はずむように 奏でるように。みしま暮らしのススメ
みしまりずむ
MISHIMA-RHYTHM

発行：三島市広報広聴課　電話：055-983-2620

はずむように 奏でるように。みしま暮らしのススメ

みしまりずむ

MISHIMA-RHYTHM

三島市

「三島が好き」。
このまちを愛おしみながら、
素敵に暮らしたい。

世界遺産・富士山を仰ぐ静岡県三島市。
古くから東海道の宿場町として栄えたこのまちは、
四季ごとに美しさを競う豊かな自然と、温暖な気候、
そして美しいせせらぎが街中を流れる
生活環境がここにあります。
「みしまりずむ」とは、
三島というまちを人生のステージとして、
イキイキと個性豊かな暮らしを楽しむこと。
そして、そんな暮らし方の達人たちを
「みしまりすと」と名づけました。
つまり、三島市民はみんなが主人公であり、
「みしまりすと」の一員なのです。

美しい四季の街並み

街中に、湧水がせせらぐまち。

駅前や市街中心部に富士山からの湧水があり、澄み切ったせせらぎとなって流れる三島は、「水と緑のまち」。美しい四季の彩りも豊かに、毎日目にする街並みや散歩道そのものが自然のギャラリーです。

便利な交通アクセス

品川駅まで
「JR東海道新幹線（ひかり）」で
こだまでも47分
37分

東京駅まで44分。通勤ラクラク。

今、三島から首都圏へ新幹線通勤する人が増えています。座れて、満員電車知らずの新幹線は、体力的にとても楽。本や新聞を読んだり、メールを送ったり、自分の時間が持てるのも魅力です。

私たちが「みしまりすと」です。

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.01

自然とのいい距離感。三島暮らしを満喫しています。

大塚 庸兵さんファミリー

ウッド調に統一された薪ストーブのあるリビング。多彩な趣味のグッズが楽しさを演出する素敵なお住まいに、ある夜、東京から帰宅したばかりの大塚庸兵さんを訪ねました。

大塚さんは富士宮の出身。新幹線通勤で、品川の大手不動産ポータルサイト運営会社に勤務しています。

「フレックスがあるので多少前後しますが、だいたい毎朝7時15分に子どもと一緒に家を出て、小学校まで歩きながらいろんな話をするのが日課です。三島駅から8時前後の新幹線に乗って品川へ。帰り時間はまちまちですが、早ければ夜8時には家でくつろいでいます」。三島への移住はファミリーのかねてからの夢だったそうで、ご主人と奥様（静岡勤務）の通勤事情や双方のご実家の位置、都市環境と自然環境のバランスなどを考え、三島に居を移すことを決めました。

「新幹線通勤はとにかくラクです。品川まで1時間もかからないですし、ゆったり座れるので、都内近郊から通っていた時の状況とは天と地の差ですよ」

新幹線（特急分）の交通費は自分で負担していますが、東京近郊との家賃差を考えれば十分にペイできる上、奥様の実家からの子育てのフォローなども考えると、三島に住むメリットは充分にあると言います。「さらに大きいのが伊豆縦貫道～東名・新東名の存在。富士宮の実家までほぼノンストップ。なまじ近隣に行くよりも近いくらいです」。リビングのストーブの薪は自分で割り、実家にストックしているそうで、日常的な富士宮への行き来も快適だと言います。

そんな家族の楽しみがご主人が立ち上げた「みしま冒険クラブ」。三島を中心とした同好のファミリーで、手作り筏での川下りやキャンプなど、三島のフィールドを遊び尽くしているのだそう。また奥様も、親子が楽しみながらともに学ぶ地域のコミュニティを立ち上げるなど、家族が一体となって三島暮らしを満喫しています。

「いろんな遊びや学びを通じて子どもが楽しめるのはもちろん、私たち大人にも新たな友人が増え続けています。知らないまちに住む不安は誰にでもあると思いますが、何かを始めてみれば、三島ならきっと素晴らしい仲間ができるはずですよ」

大塚 庸兵さんファミリー　【みしまりすと歴 4 年】

ご主人は富士宮の出身。沼津市出身の奥様、小学2年生の息子さんと共に「いずれは静岡へ」の夢を叶え、4年前に三島に移住。
ご自身で立ち上げた「みしま冒険クラブ」などの活動を通じ、趣味のアウトドアライフを家族で満喫されています。

みしまINFO

みしま冒険クラブ

地域の親子が集まり、季節ごとに楽しい遊びを繰り広げているみしま冒険クラブ。昨年の夏には、タイヤや牛乳パックなどの浮力を生かして、子どもたちがそれぞれに工夫を凝らした手製の筏で狩野川を下りました。

大塚さんのある一日

7：15	お子さんと一緒に「行ってきます!」親子の会話を楽しみながら小学校まで同行
8：01	三島駅から新幹線乗車
8：49	品川駅到着 徒歩で駅すぐそばの会社に出社
	～ 仕事タイム ～
20：15	退社
20：34	品川駅から新幹線乗車
21：22	三島駅着
21：30	帰宅・夕食

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.02

新幹線通勤の貴重な時間。

小野 美智代さん

小野 美智代さん　【みしまりすと歴 12 年】

富士市出身。東京新宿区の国際協力NGO公益財団法人ジョイセフへ三島から新幹線で通勤。子育て中のママでありながら、国内外への数々の出張もこなす。また三島では、健康的に走ることで女性の健康と美を実現する「HiPs」を主宰。

〈 HiPs 〉
https://www.facebook.com/HiPs.mishima/

富士市出身のパートナーとともに、結婚を機に三島に移住してから12年。2児のママとして、また女性のいのちと健康を守るジョイセフの職員として多忙な日々を送っている小野さん。「今やすっかり三島市民」という小野さんに三島での毎日についてお聞きしました。

「働く母親なら誰もが悩むのが、子育てと仕事のバランス。私の場合は新幹線の改札を通るときに、パッとスイッチが切り替わるんです。移住先を三島に決めたのも新幹線通勤が便利という理由でしたが、ママになってから思わぬ効果にも気づかされました」

さらに、快適に座って通える新幹線では忙しい時は仕事もできるし、何よりも『一人になれる貴重な1時間』の大切さを実感していると言います。

そんな小野さんが三島で、女性の健幸美をテーマに楽しく走ろうと「HiPs」を立ち上げたのが2013年。

「そもそもは『産後太りを何とかしたいね』、というママ友たちとよく出る会話から始まったんです。」

さらに東日本大震災の被災者の言葉を聞き、「自分は果たして2km先へ走って避難できるか?」「子どもを抱えて高台まで駆け上れるだろうか?」と、子どもを持つ母としての不安も背中を押しました。

女性なら誰もが願う健康的な美を手に入れるために、週に1日、ないしは2日、楽しくおしゃべりしながらジョギングをしているうちに、健幸美以外にも毎日の充実感で笑顔が増えて行くことを実感。

HiPsでは、月に一度満月の下を仲間と会話しながら走る「満月ジョグ」を定例会として、折々のジョギングイベントや、「健康と美」をテーマとして地域や団体と提携した催しなども多彩に展開し、その趣旨に賛同する女性の輪がますます拡大しつづけています。

職業柄、国内外への出張の際には必ずシューズを持って行き、現地を走っているという小野さん。

「三島は大都市圏のように車の危険も少なく、リラックスして走れる街ですね。それに自然や季節感を心地よく肌に感じながら『走ることを楽しめる街』という意味では、今まで走ったことのある街の中でも飛び抜けています」。

新緑の間からキラキラ光る木漏れ日、美しいイチョウ並木や川のせせらぎとホタル、三嶋大社などの歴史の息吹、そして街角の小径など、季節とその時の気分に合わせてさまざまなコースを選び、いつも新鮮な気持ちで楽しく走る…。三島に暮らす女性としての健幸美を、ありのままの自然体で楽しんでいるようでした。

小野さんのある一日

6：10	起床 洗濯・家事
6：40	上のお子さんの食事と 登校前確認
7：10	下のお子さんの 食事の世話～身支度
7：40	下のお子さんと一緒に 「行ってきます」 保育園へ送り 三島駅へ
8：12	新幹線乗車 PC作業や読書など
9：30	始業 ～ 仕事タイム ～
17：00	ジョイセフ退社
17：26	東京駅から新幹線乗車 PC作業、仕事の残りなど
18：35	帰宅・家族で夕食
20：20	ジョギングスタート
21：45	帰宅・入浴
22：00	フリータイム

みしまINFO

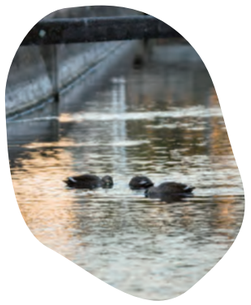
「IZU aRe」風の谷のビール（オラッチェ）× HiPs

HiPsに集う伊豆半島在住の健幸美にこだわる女性たち13名で企画。メンバーが思い描くコンセプトの全てを盛り込み、地元伊豆で栽培した麦で造った伝統的な正統派エールビール「伊豆エール」をベースにして、新ビール「伊豆アール：IZU　aRe」が生まれました。この「伊豆アール」の誕生を記念し、20年来、根強いファンを持つ伊豆エールのボトルラベルも期間限定で刷新。バレンタインデーやひなまつり、ホワイトデー、卒業＆歓送迎会と華やぐシーズンに、このaLe と aReのペアボトルでさらにホットに乾杯できるように。ラベルは、2つのボトルを左右に並べるとフルートグラスとハート（♡）が重なるようにデザインされています。時にはカップルで、時には仲間と同僚と、時には家族で。大切な記念日のテーブルをこの緑と赤のラベルが飾ります。香り、色、音、風味、のどごし…2種を飲み比べてお楽しみください。なお、この2種のビールは共に、売上の3%が公益財団法人ジョイセフに寄付され、途上国の女性の健康支援に使われます。入口から出口まで「女性目線」と「健幸美」にこだわったビールです。

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.03

街も人も、明るく開放的なのが三島のいいところ。

近藤 あいさん



「三島に住んで7年目になりますが、最初に三島駅北口に降りた時は、ずいぶんサッパリした街だなと思ったのを覚えています」と笑うのは、近藤あいさん。

長野県から大学入学にともなって初めて来三した時の様子をそう語ります。「もっともすぐに南口を見て、それが大きな勘違いだったことに気づきましたが（笑）」

実際に三島に暮らしてみてすぐに感じたのは、街中に美しいせせらぎや緑があふれていることの効果。

「長野にももちろん川はありますが、三島は小さな流れがいつも身近にある。里川と言うんでしょうか、暮らしと川や緑がとても近くて住んでいるだけで心地いい街だなと、実は今でも思っているんです」

さらに、三島にはどこか開放的な雰囲気がありますよね。学生時代から街づくりを通じて幅広い方との親交を広げてきた経験の中で、三島には太陽が降り注ぐ明るい街のイメージと、人そのものが開放的でどこか温かいという思いが育ってきました。

「長野市は長い歴史を持つ門前町なので、街並みも気風も伝統的というか固定的なところがあるんですが、三島は街道筋の街ですから、その対比が良く感じられます。若い人たちが他の地域に比べて街とつながろうとしている空気がありますし、漠然とではあっても『何かしてみよう』という気持ちが濃い気がするんです」

三島に住んでいると、街のあちこちにコンパクトな人のコミュニティがあることが良くわかります。そして、そんな小さな仲間の輪たちが自然につながっていける距離感の近さも三島の魅力の一つです。

「誰もがSNSを使うようになって、その動きがさらに活発になっています」

ご趣味は、目的を決めずにふらりと歩く三島市内の散策。休日や会社の帰りなどに少しの時間を見つけて、ふだん通らない道を歩いてみたり、公園で鳥のさえずりを聞いたりしていると、自分が暮らしを楽しんでいるという実感が湧いてくるといいます。

「ちょっとした街角に新しいカフェができていたり、素敵な雑貨ショップを見つけたりするのが嬉しいんです。毎日毎日、少しずつ街が呼吸しているというか、生きている感じがするんですよ」

近藤 あいさん　【みしまりすと歴７年】

長野県出身。大学入学を機に三島へ。学生時代から街づくりに積極的に関わり、卒業後は三島市内の建設会社に就職。三島らしい快適な暮らしを満喫しながら、地域の人々とのつながりの和を広げ続けている。

みしまINFO

日大前のイチョウ並木

日大前のイチョウ並木は市内最高の散歩道のひとつ。みずみずしい緑が陽光に輝く初夏、そして舗道一面が鮮やかな黄色に染め上がる秋。四季の移り変わりを五感で感じられるのも、三島暮らしならではの魅力です。

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.04

三島は、出逢いから何かが生まれる街。

「ひと言でいうと、三島ってとっても不思議な街です」
三島市内のビルにあるtoiz事務所でお目にかかった大平さんに、三島の街をどんな風に感じているかを聞くと、そんな答えが返ってきました。
「不思議と言ってもそれは良い意味です（笑）。仕事柄いろんな街に行きますが、どの街にもそれぞれ個性があって、中でも伝統がある街ほどそのブランドイメージが強固なんです。でも三島には古くからの歴史があるにも関わらず、固定化されたイメージがありません」
例えば京都に移住すれば、きっと長い時間をかけて、京都の伝統と文化に溶け込んでいくことがライフスタイルのテーマになると思いますが、三島にはそれがないんです。
「外から流入する人や文化を古くから受け入れ慣れている、いわば街道の歴史が、人々の気持ちの中に根付いているからなんでしょうか」
三島の人々には、他の地方の異文化と考え方を持った人を寛容に受け入れるだけでなく、その異質感を面白がってくれる下地があると感じています。
大学在学中に三島に拠点を構えたtoizでは、そんな許容力の高い街の文化の中で、地域の活性化から行政関連、民力を結集したイベント企画など、旧来のカテゴリーを超えた分野にまでその翼を広げています。
「toizでは、今までにない切り口で新たな魅力を発見したり、異なる分野を結びつけ新たな価値を生み出す事業が主眼になっていると言えるかもしれません」。日頃から三島市内に住む感度の高い人々を見つけ、また結びつけることで、三島という街の可能性を探っているそうです。
独特の個性を持っていたり、新しい取り組みをしていたりする人が好き。その多彩な人脈は、ほとんどがプライベートな友人関係の中から生まれてくるそうです。
「三島のもうひとつの魅力は、地域に根付いたお店や経営者が多いこと。それまで知らなかった人とも、一緒にお酒を飲むことで意気投合して友だちになれてしまいます。そんな出逢いのあるお店が多いから、私のシェアハウスに集まる外国人たちも安心して夜の街に出かけていきます。ツーリストが街を知るためのエントランスの役割を、こういうお店が果たしているという側面はありますね」
江戸時代の宿場町のあり方が、現代のスタイルに姿を変えながらも、今も脈々と息づく三島。
「多様な文化や個性を持つ人々が出逢い、何かを生み出せる。そんな土壌を持つ三島を舞台に、これからも興味あるアクション を起こしていきたいですね」

三島の人々には、他の地方の異文化と考え

大平 葵さん

大平 葵さん【みしまりすと歴 5 年】
大学時代に参加した伊豆の活性化をプランするサークル活動を通じて伊豆の魅力を知り、在学中に伊豆市に移住。toizを起業する。その後三島に本拠を移し、まち歩きアプリ「みしまぁるく」やタブロイド紙「風穴」を企画制作。伊東市の全日本まくら投げ大会の立ち上げなど全国各地の地域活性化事業に携わる。三島市内の自宅兼シェアハウスには、外国人を中心に多くの若者が集う。

〈 みしまぁるく公式サイト 〉 http://www.mishimarc.jp/

みしまINFO

自宅兼シェアハウス

大平さんの自宅はシェアハウスも兼ねています。外国人にも情報がネットや口コミを介して広まり、三島にステイする若者のサロン的存在として、いつも多くのツーリストでにぎわっています。

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.05

ハンドメイドを通じて、三島の新しい刺激と魅力を発信したい。

渡辺 和子さん

渡辺 和子さん　【みしまりすと歴 14 年】

函南町の出身で14年前に結婚を機に三島へ。自身や仲間の手作り作品を集めたハンドメイドショップ『riry』を運営する傍ら、ハンドメイドサークル『ママンマルシェ』の初期メンバーの一人として作品の展示即売会などを展開。
昨年7月に主宰したハンドメイド市『楽寿の森マルシェ』では、100以上のブース参加と楽寿園の年間最高の入場者数を記録した。

〈 楽寿の森マルシェ FB 〉
https://www.facebook.com/rakujunomorimarche/

三島の目抜き通り、大通り商店街の一角。ご主人のご実家でもある家電店内にある、ハンドメイドショップ riry。
服飾関係の学校を出て、東京で服飾デザインの仕事をしていたという渡辺さんがハンドメイド作品を手がけるようになったのはお子様の幼稚園時代。数名のママ友とハンドメイドサークル『ママンマルシェ』の活動を始めてから制作熱が再燃し、今は子育てで忙しい毎日を送りながらも、自分が着たいと思う服を週に2着ほどの自然なペースで制作しているそうです。
「ママンマルシェというサークルは、ハンドメイドであればジャンルを問わないのが魅力で、立ち上げ当初は10数名だったメンバーが今では50名を超えるまでになっています。服飾やアクセサリーはもちろん、木工から植木まで本当に多彩な作品を手がけています」
その言葉を裏づけるように、riryの店頭には自身の作品はもちろん、袋物やアクセサリーなどなど、友人や知り合いの作品が幅広く取り揃えられています。
そんな渡辺さんに昨年、「楽寿園で7月にハンドメイドのイベントをやってみないか」と声がかかりました。
ママンマルシェのメンバーと共に、時間をかけて1つ1つ準備を進めた『楽寿の森マルシェ』。当日は100以上のハンドメイド作家のブースで楽寿園が埋めつくされ、楽寿園開園以来、最高の入場者数を記録するほどの多くの人出で賑わいました。
多彩な展示会を開催するその原動力は「自分と同じ子育て中のママや地域の女性に、もっと外に出て新しい発見をしてほしい」という想いから。自分ひとりで家にこもりがちな子育てママに「街には楽しい刺激がいっぱいあるよ!」と伝えたいと語ります。
自分の周りに集うハンドメイド仲間や友人も、そんな活気やエネルギー感でいっぱいの人ばかり。「三島ってお祭りや催しがとても多いですよね。それはこの街に元気な人たちが多いから。そんなエネルギッシュな個人がグループになれば、そこには強い発信力が生まれるはずです」。
作るのが好き。人とつながるのが好き。自分の自然なライフスタイルを通じて、三島発の元気を盛り上げ、昨年以上に楽しい『楽寿の森マルシェ』の実現が、今の大きな目標だそうです。

みしまINFO

楽寿の森マルシェ

子育て世代の力で、地域の賑わい作りを！をテーマに、2016年7月28日に初開催。楽寿園がママたちの素敵なハンドメイドや、おいしいもの、たのしいことで埋めつくされました。大好評を受けて、第二回は2017年12月の開催が決定しています。

We are みしまりすと
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々 Vol.06

子どもが、居心地がいいと思える三島へ。

長澤 禎文さん

長澤 禎文さん　【みしまりすと歴 24 年】

愛知県出身の長澤さん。1993年、結婚を機に奥様の実家のある三島へと移り住み、お子さんの小学校時代の 2003 年に発足した「南小学校おやじの会」に参加、その後 PTA 会長も歴任。
以降、「南中学校おやじの会」「学校地域支援本部」「Not Hitori Bocchi プロジェクト」などの活動を通じ、三島の地域環境や教育環境を育てるコミュニティ活動に積極的に取り組んでいる。

〈 Not Hitori Bocchiプロジェクト FB 〉
https://www.facebook.com/Not-Hitori-Bocchiプロジェクト

すっきりと晴れた空に富士山の秀麗な姿が浮かび上がる、おだやかな日差しの朝。にこやかに通学路の美化作業に勤しむ長澤さんを訪ねました。
ふだんから一人で南小学校の通学路を歩き、子どもたちに「おはよう」と声をかけています。また同時に保護者や生徒、地域の人たちが一体となった100人規模での『通学路キラリ大作戦』を定期的に実施しているそうです。
「こういう活動は、思い立ったときに自由に参加してもらうことが肝心。何かの義務があると初めての方が参加しにくいですよね。だから揃いのユニフォームも作らず、ゆる～くやっています（笑）」
結婚を機に移り住んだ三島で地域活動を始めたのは、お子さんが小学生だった2003年。発足したての『南小学校おやじの会』に加入したことがきっかけとなりました。
「要するに、父親が子どもと一緒に楽しんじゃおう!という趣旨の会なんです」
『南小学校おやじの会』は、夏の肝試しや冬の餅つきなど、親子で楽しめる多彩なイベントを企画実行し、他の学区からも大きな反響を集めました。
その後も学校評議員、学校支援地域本部コーディネーター、民生委員の主任児童委員など、子どもと地域を結ぶ活動を積極的に展開しています。
そんな経験を通じてわかったのが「子どもをひとりぼっちにしないこと」の大切さ。不安定な時期の子どもは、限られた人間としか接触しない学校で自分の居場所を見失いやすい。
「私は先生でも親でもない地域のおじさん。でも子どもにとっては笑顔で声をかけてくれる人がいるだけで力になるんじゃないか、と思うんです」
そんな長澤さんは今、ひとりぼっちになりがちな子どもの心に寄り添う大人を増やそうという「Not Hitori Bocchiプロジェクト（ノット・ヒトリ・ボッチ プロジェクト）」に力を注いでいます。
「一人の力なんて限られていますから、周囲の力添えがなければ何もできないんです。でも三島の人は『何かをやろう』と声をかけると『いいね!』『これなら協力できるよ!』とナチュラルに賛同してくれます。このような温かいつながりが子どもや地域へ広がっていく手助けをしたい。もっともっと、三島が子どもにとって居心地のいい街になってほしいですね」

みしまINFO

Not Hitori Bocchi プロジェクト

「子どもが命を落とす事件や事故をなくしたい」その思いから、無邪気な頃からコミュニケーションをとり続けることの大切さを伝えています。子どもが将来ひとりぼっちになってしまった時に寄り添う人がたくさんいてほしい、心からそう願っています。

We are みしまりすと Vol.07

三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々

音楽に満ちあふれる三島の「元気」を、全国へ。

田中 みどりさん

田中 みどりさん　【みしまりすと歴 33 年】

山梨県から中学時代に三島へ。大学で音楽教育と作曲を学んだ経験を生かし、自宅で子ども向けのピアノ教室を営みながら、オリジナル曲の制作、近隣施設・団体へのテーマ曲提供、イベント等での弾き語りライブなど、多彩で幅広い音楽活動を展開中。

〈 みどり音楽工房 〉
http://midoriongakukobo.com/

日頃から弾き語りライブを行っているという大社の杜みしま。お会いした田中みどりさんは、とても魅力的な笑顔で出迎えてくれました。

2001年に幼稚園のママさんたちと結成した『どんぐりーず』というグループでライブ活動をスタート。その後2014年6月からは、単独でのピアノ弾き語り活動も開始し、ここ大社の杜みしまを始めさまざまな舞台で、年間100本以上のライブを開催しています。

「ライブを始めたのは、ちょうど子育て真っ最中の頃。誰も同じだと思いますが、子育て中って親としての自分と個人としての自分のバランスが難しい時期。私も、もっと外に出たい！ 周りの人ともっと関わりたい！という思いが募ってライブを始めました」

今ではその輪がますます広がり、自宅でのピアノ教室やライブ活動、歌声喫茶『健康！歌声クラブ』などをベースとしながら、高校の音楽講師、オリジナル曲の制作・提供など、「音楽」をキーワードとしてジャンルを超えた多彩な活動を展開しています。

またお子さんとともに、みしまびとの映画『惑う After the Rain』の制作にも参加するなど、多岐にわたる方面から三島の魅力を発信しています。

「私の原動力は、もっとワクワクしたいという気持ちですね。これまでに教えた150名を超える生徒さんたちにもずっと『自分のハッピーを自分で作れるように』と伝えつづけているんです」

もちろんその思いは自身の子育ても同じ。みしまびとへの参加も、知り合いに誘われて「一生に何度もないこんな機会に関わらなかったらきっと後悔する」とまず自らが参加し、その後、映画好きな娘さんにも声をかけ、親子一緒での参加が実現しました。「何とか自分でやりたいことを探せるように育ってくれたみたいです（笑）」

スタッフとしてさまざまな準備に携わった映画制作の経験を通じて「大勢が力を合わせて何かを生み出す現場に立ち会えた、その喜びが最大の収穫でした」と振り返ります。

三島という街に、年々愛着が深まっていくという田中さん。ご自身の音楽活動も手探りからのスタートで、ここまでやってこられたのは三島の人々に支えられたからだと話してくれました。

この春に完成する念願のオリジナルCDを持って全国をまわり、『三島の田中みどりです！』と三島の魅力を伝えていくことが、これからの夢です。

みしまINFO

大社の杜みしま

全国からさまざまな人やモノが交流してきた宿場町・三島の文化を、今に蘇らせようと、大社の門前にオープンしたユニークで新しいコミュニティスペースです。裏路地のような空間に多彩なお店が集い、店と店、企業、人などがコラボレートしながら、三島発のサムシングを発信！

We are みしまりすと Vol.08
三島で自分らしいライフスタイルや幸せな毎日を送る人々

美味しく安心な、三島産野菜のファンの輪を広げたい。

鈴木 達也さん　佐伯 勇さん

鈴木さんが三島の地に移り住み、フードカルチャー・ルネサンスを創業したのは2年前。そもそも農業を始めようと思ったのは、東京のIT関連企業の社員として携わっていた事業がきっかけでした。

「ITを活用した農業用ネットワークやインフラの開発・整備に携わっていたのですが、そこで実際の農業の現場を見て、後継者不足による国内農業の衰退の問題、その他、野菜の生産や流通など、現状の様々な課題に直面したんです。最初は仕事としてあくまでも農業支援という立場での状況改善を考えていましたが、このままでいいんだろうか?自ら渦中に踏み込み取り組むべき課題では?また、農業は一生を懸ける価値がある産業ではないか?という自分自身のビジョンへと変わっていったんです」

そんな事業に携わる少し前に、当時借家で暮らしていた神奈川県から永住の地を探していた時にふと箱根を越えてみたらどうなんだろう?と訪れたのが三島。「雄大な富士山と眼下に広がる駿河湾の水平線を前に、一度は静岡県を離れ長年忘れていた心が疼き、別天地を見つけたような気がし、すぐに三島への移住計画を進めたので、実は農業よりも三島移住が先だったんです」

東京への新幹線通勤をしながらも、農業への夢はふくらみ続け、空き農地を紹介してくれる知人や多くの地主の存在もあって一大決意を固めたのだそうです。「正直、不安も多かったのですが、行政やJA、近隣の地主の皆さんから親切かつ丁寧なバックアップをいただき、何とか少しずつ軌道に乗ってきています」と鈴木さん。現在では標高の異なる大小11の圃場で300品種を超える野菜を農薬や化学肥料を一切使わず栽培するまでになりました。

野菜づくりに最適だという三島の土壌を生かして栽培する野菜には、全国各地のレストランやホテル、個人のお客様などから、毎日指名で多くの注文が入ります。

そんな野菜の栽培・収穫から発送までをスタッフのひとりとして共に行っているのが佐伯さん。昨年、三島市の移住推進補助事業を受けて三島に移り住んだ、オスマン・サンコン氏のご長男です。

「朝は早いけど、夜も早い。東京時代とはまったく違う生活ですが、今ではこの方が人間らしいライフスタイルだと実感しています。あの通勤ラッシュもないですしね(笑)」

東京時代には健康維持のためジムに通っていましたが、今ではそれも不要。「初めてここに来た時と比べると見違えるほど体が絞れた」そうです。

「野菜が少し苦手だった妻も、自分の作った野菜を心から美味しいと言って食べてくれます」。早めに仕事を終え、わが家で奥様とともに食卓を囲む時の充足感は何ものにも代えられないと、三島暮らしを日々楽しんでいます。

そんな佐伯さんを始め、20~30代の若者や40代の子育て中のお母さん方が集うフードカルチャー・ルネサンスのこれからについて、鈴木さんは「例えばレストランとのコラボレーションや農と食に関わるアグリツーリズムなど、“種から口に入れるまで”をもっと身近に感じてもらえるような多彩な事業を展開していきたいですね」と熱く語ってくれました。

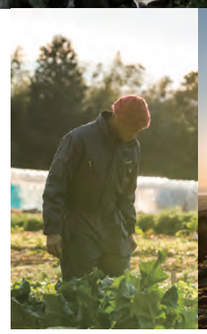
鈴木 達也さん 【みしまりすと歴 16 年】

フードカルチャー・ルネサンス代表。島田市出身。東京のIT企業への勤務の傍ら、これからの新しい農業スタイルを確立するため、2年前にフードカルチャー・ルネサンスを設立。「健全な食を地域社会とともに育み、次世代に繋げる」を理念に、箱根西麓の大小11の圃場で多品種の野菜を栽培・直販しながら、農業体験や食育活動、料理教室やレストランとのコラボイベントなどを展開している。

〈 フードカルチャー・ルネサンス FB 〉
https://www.facebook.com/FoodCulture.R/

佐伯 勇さん 【みしまりすと歴 10ヶ月】

東京生まれ東京育ち。オスマン・サンコンさんのご長男としてギニア大使館関連のサンコン氏の仕事をサポートする中で農業への興味を募らせ、沼津出身の奥様のご縁もあって三島に移住。フードカルチャー・ルネサンス鈴木氏のもと、農薬や化学肥料を一切使わない野菜の栽培に取り組んでいる。



みしまINFO

箱根西麓三島野菜

近年ではブランド野菜としての認知も広がっているのが、三島が誇る「箱根西麓三島野菜」。関東ローム層の地盤に火山灰が堆積した三島の土壌。豊饒さと水はけがともに優れたこの大地と豊かな日差し、四季の変化の中で育つ、色鮮やかで味の濃い野菜は、全国のシェフたちから熱い注目を集めています。

三島市・移住推進補助金交付第一号

三島市が 2016 年度からスタートした移住推進補助事業。その補助金交付の第一号が佐伯さん。この「住むなら三島移住サポート事業」では、一戸建てやマンションの取得やリフォーム、耐震補強支援から子育て世帯への給付まで、移住者に最大 265 万円の補助を行っています。